

# シュティフターの『森の小径』における 自然による救済

中 村 康 二

テ キ ス ト

Adalbert Stifter : Studien (2 Bde.) Hrsg. von Jürgen Jahn.  
Leipzig 1968

本文中の引用につけられた ( ) 内の数字は “Der Waldsteig,,  
(In. Studien Bd. I) の頁数をあらわす。

シュティフター Adalbert Stifter (1805~1868) は、後年、彼の生まれ故郷、現在はチェコスロバキア領に属する南ボヘミアの森林地帯、モルダウ河畔の小村オーバープランとその周囲の自然を回想して、「魅惑的ではないが、静寂に満ちた目立たない所であり、しかしそれだけに人間の横暴がまだほとんど及ばない自然のままの地方である<sup>(1)</sup>」と述懐しているが、大森林と大河とが奇しくも織りなすこの壮大にも単調な自然を、彼は繰り返し作品のなかに描いている。それは、つとに最初期の『喬木林』Der Hochwald (1842) に始って晩年の長篇歴史小説『ヴィティコー』Witiko (1867) にいたるまで続き、シュティフター文学を話題にするとき等閑視しがたい主導低音となっている。ここにとりあげる『森の小径』Der Waldsteig も、表題からも知られるように、そうした森の静謐と慰安に満ちた自然を中心舞台とする作品のひとつである。むろん、シュティフターの文学は、すでに闡明を与えられているように、単なる「郷土文学 (Heimatlidung)」というような通り一片のカテゴリーのなかで甘んじえない深みと広がりをもっているが、シュテッフェン Konrad Steffen いうところの「ふるさと

は、すでに彼の肉体よりも、むしろ精神の一部とな<sup>(3)</sup>った」という意味では、『森の小径』も、『喬木林』や『ヴィティコー』と同じく、詩人の根深い郷土愛を透過してはじめて生じえた作品というべきかもしれない。

この物語は、1845年に、カルテンブルナー K. A. Kaltenbrunner によって発行されていた『文学と地誌のための上部オーストリア年鑑』Oberösterreichisches Jahrbuch für Literatur und Landeskarte. 誌上にまず発表され、のちに改作の斧鉞をくわえられ、1850年に、『習作』Studien 第五巻に『落書のある樅の樹』Der beschriebene Tännling や『ふたりの姉妹』Zwei Schwestern などとともに収録され、新たな装いのもとに<sup>(4)</sup>上梓された。

発表当初、この作品が批評界でどのように受けとめられたかを調べてみると、ほとんど無視にちかいありさまであったといえる。わずかにヘムゼン Wilhelm Hemsén が『文学的団樂のための雑誌』Blätter für literarische Unterhaltung. において、それも辛辣このうえない書評をものしているばかりである。

「この作者がわれわれに見せてくれるのは、のらくら者以外のなにものでもない。それはすでに滅亡しカビ臭くさえ思われる、〔……〕話題は卑俗な領分に貶しめられ、純粹な関心は掃き捨てられ、低俗な喜劇の素材のもつ陳腐に墮している。そこには精神的支柱、魂、内面的基盤が欠如している」<sup>(5)</sup>（以後、下線および圏点はすべて筆者による）

まことに手厳しい批評である。当否はさておき、ヘムゼンがこの書評で具体的には何を指弾しているのかを理解するためにも、はじめに『森の小径』のあら筋 (Fabel) を紹介しよう。

それぞれに生活信条を異にする大人たちから誤った教育を受けた主人公が、身寄りの者たちの死後、莫大な遺産を相続し、物質的充足の日々を過ごしている。しかし、ヒポコンデリーと人間嫌いのため、鬱々として楽しまず、彼はすっかり逼塞してしまう。そんなおりから、近在の医者<sup>(6)</sup>の勧め

1975. 3 シュティフターの『森の小径』における自然による救済(中村) 153 (1045)  
で温泉療法を試みるべく出発する。ある日、湯治場の森を散索するうちに、思いがけず森深く踏み込み、道に迷う。しかし、幸運にも通りすがりの純朴な樵夫に助け出される。爾来、森に慣れ親しみ、ついには森の小径で知り合った苺摘みの娘と結婚し、健全な心身を回復する。

上に見るように、ごくありふれた筋からなるこの物語は、作者のほぼ同時期に書かれた他の作品、たとえば『愚者の城』Die Narrenburg (1843) や『男やもめ』Der Hagestolz (1845) と同様に、「愚者 (Narr)」ないし「変わり者 (Sonderling)」を主人公とし、「結婚による回復」をテーマにしている。コッシュ Wilhelm Kosch は、ここに充填された大方のモチーフが、素材的に前代の浪漫派の文学に依拠していると指摘している<sup>(6)</sup>。しかしまた、浪漫派のみならず、シュティフターの同時代人でありウキーンっ子の血をわかせたライムント Ferdinand Raimund やネストロイ Johan Nestroy も、しばしば彼らの民衆劇にこれらのモチーフやテーマを援用しているのも事実である<sup>(7)</sup>。ヘムゼンが、主人公のキャラクターと二重映しにしてシュティフターを「のらくら者 (Tagedieb)」となじり、「低俗な喜劇の素材 (Lustspielstoff)」とあげつらっている所以である。しかし、モチーフやテーマの素材的依存性をもって物語作品を難じること自体、アルブレヒト Paul Albrecht の「レッシング論」<sup>(8)</sup>を引合いに出すまでもなく、創作的通則の無知を露呈するに他ならない。また、当時の中流階級の知識人に固有なビーダーマイヤー的好尚から察して、ネストロイやライムントのまだ芸術的市民権が認められていなかった諷刺劇との素材的共通性が「低俗な」傾きとして歓迎されなかったのも、けっして怪しむにたりない。

もとより、物語文学の本質は、当該物語が依拠する素材源や素材の性質によって規定されうるものではない。そうではなくて、問題は、このような喜劇的でもあり「カビ臭くさえ思われる」素材をシュティフターがどのように加工し、これを独自の物語に高め、詩人格化したかに懸かっている。たしかに、これらの「喜劇の素材」が採用されたがために、『森の小径』は、

この作者にしては珍しくフモール (Humor) の勝った作品になっている。先頃翻刻されたプラーグ版シュティフター全集の解説者ミュラー Leopold Müller は、シュティフターが「おずおずとフモールの明るい広野へ楽しい狩猟に出かけた<sup>(9)</sup>」と述べ、作者の勇み足を指摘している。他方、パウツァル Otto Pauzar は「シュティフターのフモレスケ (Humoreske) は、浪漫派の辛辣なイロニーとは違い、好意ある微笑を漂わせており、彼のフモールは倫理的な人のもつ深い真面目に支えられている<sup>(1)</sup>」と述べ、ミュラーに比べ積極的な評価を下している。いずれにせよ、フモールの概念規定がいかに困難な現状では、その評価はおのずと左右に揺れ動き、これをめぐるポレミックは、熱を帯びるほどに泥沼化するおそれがないわけではない。情調におけるこの特異性を強調するあまり、われわれは、『森の小径』が内包するより本質的な事柄、つまり人間に対する自然の感化力の問題、自然による救済の理念、あるいはシュティフターの言葉でいえば「人間が人間になること (Menschenwerdung des Menschen)<sup>(11)</sup>」のテーマを見逃すことはできない。以下の論述は、若干の文体特性とも併せて、このテーマの具体的形成の如何を追尋しようとするものである。

『森の小径』は、三人称叙述 (Er-Erzählung) による倒叙形式の構成をとっている。語り手は、導入部で主人公の「友人」(409) を自称し、すべてを鳥瞰しうる高みから、過去の出来事と現在にいたるまでに生じた変化をかいつまんで報告する。このために物語の概容が明示され、読者は、保証された方向を与えられるとともに、叙述される事柄との間に一定程度の距離、つまり余裕を得て、さながら懐古談の聴き手でもあるかのように、穏やかな和らぎの情緒を享受できる。チブリウスと渾名された主人公は、「かつては大馬鹿者であった」(409)、だが現在は「朗らかな表情をしており、誰からも愛されている。」(409) 一個の人間にとって少なからず苦痛であり不幸の種であった出来事の悲劇的要素は、現在の地平から打ち消されており、読者は劇的緊張と悲壮味を無理強いされることはない。人物描写をはじめ、作中ひんぱんに活用される対照法 (Antithese) の主たる修

辞機能は、すでにここに看取できる。相反的な意味を担う形式素の並立がややもすると喚起しがちな重苦しい緊張は、どちらか一方に否定的な意味合いが込められることによって均衡を崩し、むしろ滑稽味となって返ってくる。

チブリウス氏の現在の幸福と過去の不幸、それは何に由来するのであるか。前者について、語り手はさしあたり「すべてはある単純な森の小径のおかげである」(409)と仄めかすだけで、奇異を覚える読者の関心を刺激する。ついで語り手は彼にとって望ましい理想的な読者像をも告知しているが、それは主人公と同じように「大馬鹿者であるすべての人々」(409)とされる。このことは、もちろん読者に対する毒々しい挑発や揶揄でも、また主人公への憐愍の要請でもなくして、ただ先入観を払拭した素直な精神の働き、省察を伴った読書、主人公とともに「森の小径」に分け入り、そこでの出来事を存分に追体験すること、つまり読者の自己止揚が期待されているのだといえよう。物語のポワント(やま)における体験話法(erlebte Rede)は、そのための作者による一寄与である。

後者、すなわち過去の不幸の原因に話がおよぶにつれ、本来の物語が始まる。

成長期における無理解な大人たち——タキトゥス流に簡便と論理的明快を旨とする合理主義者、たとえば調教に失敗すると馬を売り払ってしまう自己中心主義者、実利主義者、これらの養育の見事なおぞましい成果として主人公は登場する。つぎつぎに系累を失い「全くよるべない(recht hilflos)」(415)状況に直面した主人公が行ったことは、相続した遺産をひたすら自己の感覚的悦楽に投入することである。バイオリンに凝るかと思えば、油絵に食指をのばす。書画骨董に血まなこになるかと思えば、煙管の蒐集に熱中する。関心はその都度めまぐしく対象を替えながら不定である。そもそも、彼の渾名チブリウス(Tiberius)が、こうした分裂症的傾向を内密に読者に暗示している。Tiberiusは、ラテン語のturbulentusに語源をもつ形容詞turbulentを想起させる。ウルシュタイン Ullstein の「ド

「イツ語辞典」Lexikon der deutschen Sprache は、その語義として「渦巻きのように動く (wirbelnd bewegt)」「ひどく落ち着きのない (sehr unruhig)」「嵐のような (stürmisch)」を挙げ<sup>(12)</sup>ており、同種の辞典のなかには「混乱した (verwirrt)」の語義を掲げるものもある。ちなみに、イルムシャー H.D. Irmischer は、この渾名から「独楽 (Kreisel)」を連想<sup>(13)</sup>している。とまれ、叔父によって命名されたチブリウスの渾名のなかには、「誤った、矛盾した教育 (verfehlte, absurde Erziehung)」が彼にかぶせたエゴティスムス (Egotismus) とその愚者性 (Narrheit) の批判が込められていると解される。

世人は、叙上のような主人公の症状を斜視やこぶに類する癒しがたい「異常事 (etwas Ungewöhnliches)」(421) と見做す。

しかし、『森の小径』に関して作者がある友人に宛てた書簡のなかで「第一部はじつに潑刺していますしいたるところになお喜ばしい希望がありません<sup>(14)</sup>」と言明しているように、語り手は、世評が必ずしも肯綮を射ておらず、やがては主人公が常態を取り戻すであろうことを、含蓄ある直喩を用いて予示 (vorausdeuten) している。

「すくなくとも最初のきっかけをつくったのは、この医者である。それはのちのちまで尾を引き、ためにチブリウス氏はすっかり変貌したのである。さながら、イラクサの葉上で単調な生活をつづけ、枝に垂れさがり、縮こまったあと、ある日突然に跳びあがり、とげでおおわれた不格好な黒い殻を押し分け、美しい蛹の角と背中をあらわす孔雀蝶の幼虫にも似ていた。蛹の内部には、もう未来の煌めく翼がくるみこまれているのである」(426~427)

チブリウスの渾名が、あくまで渾名にすぎず、本名はそれとは別にテオドール (Theodor) であるように、いびつな性格も彼の本質ではない。作者は、物語の結末に近いくだりで、名前を偽ったと責める苺摘みの娘に向かい、主人公をして「私の本当の名前は、テオドール・クナイクトです」(473) と答えさせているが、健康回復にともない、彼がその正常な本性 (Natur) をも取り戻したことを示すためには、この一言がどうしても必

要であったように思われる。『森の小径』より三年早く書かれた『ふたりの姉妹』(1842)では、シュティフターは、語り手の一人称叙述者 (Ich-Erzähler) によって物語の半ばまで故意に本名を秘匿された作中人物を登場させ、外見からの人間の不可知性を首尾よく印象づけているが、『森の小径』における渾名の応用も、何気ないが極めて作為に富んだレトリックである。生気の充溢した自然の豊饒をまだ知らない孔雀蝶の幼虫の直喩が、物語のコンテクストのなかでひとときわ生彩を放つのも、数次におよぶ主人公の服装への言及が伏線になっているからである。さしあたって蛹を包む無粋な殻は、たとえば次に掲げる主人公の厚着姿との観念連合をよぶ。のみならず、蛹の脱皮現象は、のちに触れるように、主人公が森の清浄な自然の力のまえに徐々に軽装へ移行するプロセスをも巧みに予示している。

「人々から愚者と呼ばれているふたりの男が、ときおり肩を並べて庭に立っていた。医者は麦藁帽を被り、粗い木綿の上着をまとい、風が隙間から吹き込み体中を撫でていた。チブリウス氏は、フェルト帽を耳まで下げ、重ね着のうえにも地面に触れんばかりに長い衣服をボタンで留め、襟もとには大きな襞々のあるマフラーをのぞかせ、首が熱くはないかと思われた。しかも靴下を二枚重ねたうえに大型の長靴を履き、足が冷えないようにしていた」(426)

カリカチュアライズされた対照が読者の微苦笑を誘う箇所であるけれども、同じように大馬鹿者と嘲けられながら、両者のあいだには雲泥の差異がある。蛹の不格好な黒い殻にも似て、大気との触れあいを厭い重装備をしている主人公に比べ、医者はラフな軽装によって自然に対し開放的な姿勢を示す。施薬はもちろん治療もせず、みずから炎天下に出て「耕作と果樹栽培 (Landbau und Obstzucht)」(422)に従事するこの医者が、主人公を狭い室内から広い屋外へ引き出し、やがて森の世界へ旅立たせる契機となる。チブリウス氏の温泉行きは、医者信奉する自然療法の意義を汲みとって決行されたわけではないが、回復の糸口が、間接的にであれ、このようなナチュラリストに負っていることは、十分に顧慮しなければならない。

さて、医者の助言がヒントとなり温泉にやってきた主人公も、最初は保養所つきの医者の処方通りに治療に専念する。森は、まだ「窓から望遠鏡を覗いて観察する」(453) 対象にすぎない。森ちかくの乾燥した砂地に出掛け、日課に定められた歩行訓練を「時計ではかって(nach der Uhr)」(437) 消化することに汲々たる状態である。しかし、このような杓子定規な生活観念にとらわれた彼も、いつしか予定外の行動へ促される。

「数日来の好天」にくわえて「大気のこのうえなく気持ちよい晴れやかな澄明な日和」「厳しい風から庇うような四囲の岩壁」——「これらがチブリウス氏を馬車から誘い出し、しばし散索して穏やかにふりそそぐ真昼の陽光を楽しもうという気を起こさせた。」(以上436)

彼は、まず上着を馬車に脱ぎ捨て、「これまでは内部から見たこともない」(436) 森へ歩み入る。風致ある自然のたたずまいが、彫塑的な的確さをもって細部描写される。「草花と甲虫の専門画家」との論評は不当に作家像を歪曲するものだが、作者の真骨頂が色彩語を縦横に操る精細克明な自然記述にあらうことは、言を俟たない。この情景描写で注意をひかれるのは、再三ならず „nie“ (けっして～でない) とか „nicht“ (～でない) といった否定詞が重畳され、主人公がいかに自然の事象に無知であるかが強調(G)されていることである。

「チブリウス氏は森を内部から見たことがなかつた(nie……gesehen)。そもそも彼の郷里には小さな丘しかなかったが、その丘へも彼は登ったことはなかつた(nicht gekommen)」(436)

「ときおり一羽の蝶が石のうえにとまり、きらきらと輝く翅を休めていた。チブリウス氏は見たこともなかつた(nie gesehen hatte)」(438)

「折れ曲った樹々から樹脂が垂れていた。彼は見たこともなかつた(nie gesehen)」(438)

「あたりには高い樅の樹が急にみえなくなった。葉の密生したとりどりの威勢のよい茂みばかりであった。ハシバミであった。それは、森がここで終わりであり森のふちに来たことのしるしである。しかしチブリウス氏は、そのようなしるしを知らなかつた(kannte……nicht)」(444)



未知の世界に圍繞され、主人公は、新鮮な驚きと時によれば恐怖心のあまり、我を忘れる。それまで彼を悉く拘束していた偏頗な自意識から解放され、開かれた感受性のなかで自然のさまざまな事物に触れる。この様子は、自然の事物を主語に、主人公を客語に配置する原文の統辞構造 (*syntaktische Struktur*) に、顕著にあらわれている。次にその文例のいくつかを紹介しよう。

*Die milde Sonne tat ihm durch die Wiederprahlungskraft des Felsens, [……], so wohl. (437)*

*Auch waren ihm alle Dinge, [……], neu, sie gefielen ihm. (437)*

*Es begegnete ihm eine Schar wundervoll blauen Enzians, (438)*

*Nach und nach wurde es anders, die Bäume standen sehr dicht, wurden immer dunkler, und es war, als ob von ihren Ästen eine kalte Luft herabsänke. Dies mahnte Herrn Tiburius, um zu kehren. (439)*

*Dann stand ein steiliger Berg da. Der Pferd klonn ihn unverdrossen hinan. (443)*

穏やかな太陽が、一群の素晴らしく青いりんどうが、冷たい空気が、森の小径が、あらゆる事物が、彼に作用を及ぼす。自然は、もはや気紛れな意識のなかで客体化される対象ではない。この大森林のなかでは主客顛倒し、自然こそが主であり、人間は不意の来客にすぎない。童話によくみられる迷子または迷路経験のモチーフ——たとえば『不思議の国のアリス』*Alis in Wonderland*——は、『森の小径』では自己の他に目印をもたない主人公のエゴティスムに動機づけられながら、異質な新しい精神的境位の開示にあずかっている。チブリウスは、助けを求めて大声で叫び、「子供の頃からしたこともない」(441) 走る行為さえ試みる。しかし森は無言である。「薄いたった一枚の上着」(442) を通して、たちこめる冷気が彼の不安をいやます。「チブリウスは、自分がどれほど大きいともしれぬ森のな

かにいるのだということ、もはや否定できない。」(421) 彼がこの絶望的な窮地から抜け出るためには、自己の外部に原理を求めざるをえず、「彼は小径に従って前進した。」(443)

Endlich ging der Pfad bergauf und war ein gewöhnlicher *Waldsteig* geworden. Aber Tiburius kannte Waldsteige gar nicht. (443)

このあと、主人公は偶然にも樵夫に遭遇し危く難を免れるが、作者はこの場面で、主人公の救済がいわゆる「機械仕掛けの神(*deus ex machina*)」によるかのような誤解を避けるために、ふくみのある言い回しをしている。

「その樵夫は、チブリウス氏に肩を貸し、彼を支え、腕をとって麓まで案内していった」(447)

自然療法をもっぱらとする医者がそうであったように、樵夫も森の自然に密着し、森の一部ともなって生計をたてる人間である。しかも、この *deus ex machina* のようにもみえる人物の行為は、側面援助にとどまる。両者の出会いも偶然とはいえ、それは、主人公が「大ききもしれぬ森のなかにいる」という否定しがたい「彼の運命に従順に (*in sein Schicksal ergeben*)」(443) 険しい山路を乗り越えた結果の僥倖に他ならない。『森の小径』という題名の訳は間違いではないが、原題 „*Waldsteig*“ には、「坂道を上り下りする (*steigen und absteigen*)」のニュアンスが含まれており、ヒポコンデリーによる孤立化という人間的危機の克服過程が、*Waldsteig* における苦難の迷路体験に具象化されていると考えられる。この限りでは、樵夫の役回りは、筋の表面的結構においてこそいくばくか *deus ex machina* たる性格を免れえないとしても、物語の内面構造にかほどの有意性をもって関与しているかは、疑問としなければならない。もし、われわれがここに敢えて *deus ex machina* の活動をみようとすれば、それは医者や樵夫の背後に隠然と控える自然そのものと特定できよう。作中人物たちのうしろには、光をあらわす動詞 (*schimmern, glänzen, blitzen, strahlen, funkeln, leuchten, glitzern, flimmern*……) の数々が稀有な効果をあげているように、奇しき自然の光背が

1975. 3 シュティフターの『森の小径』における自然による救済(中村) 161 (1053)  
たえず輝いている。

森は、自己の堅固しい意識の極性にとらわれていたチブリウス氏に、精妙多様ないきいきとした自然界の色彩 (Farbe) ・香り (Geruch) ・形状 (Gestalt) に開眼させ、自然のなかの一部としての自己の客観的位置を否応なく自覚させる。以前は歪んだ精神が森の迷路で受けた苦痛に満ちた体験は、助け出されてのち、疲労のためにかえって久しく忘れていたこちよい眠りを貪るのにも似て、快い認識をもたらす。彼はもはや「油絵による歴史画」(454) を描かない。より小さな些細なものを「実在に即して (nach der Wirklichkeit)」(454) 素描する。放恣に走るファンタジーは抑制され、かわって現実的態度が前面に出る。対象を一本の線によって固定的に捉えるのではなく、「明暗法」(454) によって、自然の生命が有機的に関連しあいながら影を交錯させる、その事物の機微が写生されるのである。遭難を機会に森を忌避するどころか、ますます関心を募らせ、スケッチ・ブックを小脇に抱え、かって踏み迷った世界を確認すべく、森の小径を足しげく訪れる主人公の姿がみられる。

「この場所で小径が分岐しているのに気付かなかったことが、信じがたいほど愚かしく思われた。いまは、すべてが明瞭であった。森を訪れる者には誰にでも、そうなのだとは知らなかった。訪れるたびごとに、森はいよいよ明らかに理解可能となり、ついには森は訪問者にとって美と喜びとなった」(453)

シュタイガー Emil Staiger は、シュティフターの他の作品『ブリギッタ』Brigitta (1844) のインタープレタチオンにおいて、作中人物が確認行為により体験をひろめ、なじみのない現実と徐々に和解してゆく過程に美しい論証をくわえて<sup>(17)</sup>いる。チブリウス氏もまた、彼の観照的なスケッチによって自然に親炙し、体験を豊富にしてゆくといえるであろう。

ここに至り、語り手はついに「チブリウス氏は、もはや愚か者ではなかった。すくなくとも以前ほどの愚か者ではなかった」(453) と言葉を添える。

ところで、このような状況の下に、医者・樵夫につぐ三番目の嚮導者として設定された苺摘みの娘は、「チブリウス氏の人生に決定的な」(455)役割を果たすのであるが、それは単に主人公との結婚を意味するにすぎず、作者は安気にも、物語を凡庸なハッピー・エンドで締め括ることだけに喜びを感じたのであろうか。そうだとしたら、作者はいささか軽佻浮薄な幸福論者にすぎはすまいか。

ここで、アーダム・クラフト版によって、初稿と改作稿をその叙述規模に限定して比較対照すると、実頁数は28:75の割合で、補筆された改作稿は、全体として約2.7倍に脹らんでいる。その内訳は、物語を便宜上、(1)主人公の生いたちと教育環境の紹介までの導入部、(2)医者との出会いから森の小径で樵夫に助け出されるまでの中心部、(3)苺摘みの娘との出会いから結婚までの結末部、この三段階に分けて比較すると、次のようになる。

	実頁数比(初稿—改作稿)	増加倍率
導入部	5:12	2.4
中心部	15:34	2.3
結末部	7:27	3.9

これをもても、明らかに苺摘みの娘との出会いから結婚までの経過が、特に大幅に増補されている。改作によってほぼ4倍にも拡大された結末部の意味は、どこにあるのであろうか。定評あるシュティフター伝の著者ハイン Alois Reimund Hein は、『森の小径』について「過度の冗長さと饒舌な回りくどさ (unmäßige Breite und redselige Schweifigkeit) のために、その魅力の多くを失っている<sup>(18)</sup>」と惜しんでいるが、いかがなものであろうか。筆者はミュラーとともに、フモールの濃密な前半部より冗長で回りくどくもある後半部にこそ作者の本領が発揮されていると考える。

ところで、結末部を概観すると、ここに作者の形成意志の勁さを窺わせるふたつの文体特徴が目にとまる。そのひとつは、ふたつの局面に分けられる同義的な語句の反復 (synonymische Wiederholung) である。

(A)

*Sie schritt also voran, und er folgte.* (461)

彼女は先にたって歩いた, 彼はあとについて行った。(以下, 大約同じ)

*Maria ging voran über die Schwelle der offenstehenden Haustür, Tiburius ging hinter ihr.* (465)

*Sie ging von ihr weg wieder auf ihren Platz, [……]. Tiburius auch.* (467)

*das Mädchen voran und Tiburius in dem grauen Rocke hinter ihr.* (467)

(B)

*Herr Tiburius ging mit ihr.* (473)

チブリウス氏は彼女とともに行った(以下, 大約同じ)

*Sie gingen miteinander herum.* (474)

Dann *gingen sie*, er sein Zeichenbuch unter dem Arme, sie ihr volles Körbchen an der Hand tragend, *miteinander fort.* (476)

*Tiburius ging mit ihr* in die Thurschläge, er blieb dort, solange sie Erdbeeren pflückte, *ging dann mit ihr* zu ihrem Vater. (477)

*Sie gingen miteinander herum, wie zuvor.* (477)

20余頁のうち, 過半がある意味では起伏に乏しい単調な自然描写に占められ, 人物たちの動きは, 上のように手短かに伝えられるばかりである。『森の小径』のみならずシュティフターの作品の多くに, ヘッベル Friedrich Hebbel の酷評によって周知のとおり, 退屈と玩物喪志の非難が集中する所以である。しかしながら, 叙述が単調であればあるほど, そのなかで異常なまでの様式化に晒された反復が, かえって叙述内容を力強く読者に印象づけ, さらに当該の反復対象に変更がなされるとなれば, いよいよもって表白される事柄のもつ刺激性が漸層法的に昇華されることも, 真実である。(A)群は, チブリウス氏の内気ななかにも好奇心に誘われ苺摘

みの娘に随順する頬笑ましい姿を焼きつける。(B)群は、その結果、かつては愚者と笑われ人間嫌いに陥った主人公と森の娘との揺ぎない信頼関係を刻印する。gehen ないし schreiten の過去形 ging ないし schritt (行く一行った) のタウトローギッシュな反復語法によって、「時続性と単調性 (Stete und Einförmigkeit)」, 大自然の悠揚せまらぬ安定性と確実性, そのなかを歩む人間たちの倦むことをしらない精神的持久力が, 鮮明となって描出される。一見単調に流れるとみえる語句の積み重ねはまた, 読者に劇的ではないが良質で素朴な叙事的緊張を喚起する。物語は, これを主要な槓桿として, あるいは日常些事でもあろう対象を取扱いながら, ゆうにアクチュアルな作品となりえている。

なお, 結末部に関して, いまひとつ刮目すべき文体要素に言及しておかねばならない。すなわち, 主人公が苺摘みの娘に森の小径ではじめて遭遇する場面をみると, そこには森に生まれ育った娘にふさわしいメタファー (Metapher) が用いられており, 他の文体要素と重ねあわせて興味深いものがある。

「樹々の数知れぬ柱に支えられ, 森の緑色をした屋根が, 彼女の頭上に拡がり, 薄明りとほのかな光線をふりそそいでいた。彼女は白いネッカチーフを被り, イタリア娘のように額のうえに軽やかな髪の小屋根 (Dächelein) をつくっていた。真紅の襟巻には小さな炎 (Flämmchen) のような木洩れ陽 (Lichterchen) が, こぼれ落ちていた」(456)

「樹々の数知れぬ柱 (die unendlich viele Säulen der Stämme)」といい, 「森の緑色をした屋根 (das grüne Dach des Waldes)」といい, これらの建築用語を駆使したメタファーは, 森が彼女のすみかであり, 自然が本源的には人間を守護するものであることを示唆している。あの風変わりな医者や「森の人々に固有なやさしさ (Zartgefühl)」(446) を備えた樵夫と同じく, 苺摘みの娘も自然と等価な存在である。彼女は, それゆえ, 森が恐ろしくはないかと尋ねる主人公に, 「森はすこしも恐くはありません」(475) と答えることができる。そして, この森の精華ともいべき自然児は, 上掲例だけでも三箇所にもみられる縮小詞 (Dächelein, Flämm-

1975. 3 シュティフターの『森の小径』における自然による救済(中村) 165 (1057)  
*chen, Lichterchen*) によって特徴づけられている。結婚にまですすむ物語のエピローグを最も強力に規定しているのは、実にこの縮小詞の夥しさである。試みに上記以外の証例を重複を避けて列挙してみよう。

*Röckchen, Körbchen, Weglein, Fäcklein, Tellerchen, Türmchen, Hägelchen, Rindentäuschchen, Päckchen, Kästchen, Plätzchen, Blümchen, Häutchen, Kätzchen, Häuschen, Stückchen, Wörtlein, Gartenbänkchen, Gärtchen, Blättchen, ……*

事新しく説明するまでもなく、これらの縮小詞 (*-chen, -lein*) は、対象の相対的な小ささの事実と相俟って、小さなもののもつ可憐素朴な情調を表出する。伝説的古譚や童話・民話に数多く活用され、自然界の本源的な素朴さ純真さ (*Naivität*) の特徴を付与するのは、これである。主人公が苺摘みの娘のこの美しさにはじめて気付く場面 (476) が、先述した同義的語句の反復が(A)から(B)へ移行する分岐点に設定されているのは、決して偶然ではない。「こまやかな(*fein*)」「新鮮な(*gesand*)」「清楚な(*rein*)」「温容な (*hold*)」など、彼女に冠せられる限定的形容詞 (*Epitheta*) は、夥しい縮小詞によって表現される彼女の周囲の事物のつつましさと照応し、この娘と連れだって森の小径を逍遙する主人公のまわりに、「素朴なもの (*das Naive*)」のもつ寛いだ雰囲気、自然がしばしば焦燥に疲れた者に恵む静謐と安息を招来させずにはいない。

気儘な蒐集癖と奢侈に耽り、グロテスクな厚着で自然から自己疎外していたチブリウス氏は、医者・樵夫そして最後に苺摘みの娘を仲立ちに、森の小径を孜々として歩み、恒常的な力とナイーヴなものの簡素な美と喜びを認識し獲得するテオドールへ変貌する。彼はすでに一定して「グレーの上着 (*im grauen Rock*)」(456, 459, 464, 467, 468) を愛用しており、苺摘みの娘の父親は、このような主人公の服装から判断して娘との結婚に同意する。「彼は他の湯治客のような馬鹿げた服装をしていない。簡素で素直な身なりは、われわれと同じだ。」(479)

脱皮する孔雀蝶の蛹の直喩、あの自然界の生命現象とのアナロジーがす

でに予示していたとおり、自然児たる苺摘みの娘との結婚は、したがって、主人公の内部の自然と外部の自然の一体化を象徴する。作者は、物語の副人物たちを終始 *deus ex machina* から遠ざけ、主人公の内的自然のおのずからなる成長を待ち、これを蛹の脱皮にも季節の運行にも譬えうる緩やかな筋の運びのなかで忍耐強く描いたといえる。その根底には、日常われわれが不知不識のうちに享受しつつ、有形無形の恩沢と作用を授かっている自然の圧倒的な感化力に対する確たる信頼と帰依があろう。シュティフターの生きた時代は、鉄道の敷設に典型的な例をみるとおり科学技術と産業のめざましく発達した時代であり、同時にプロレタリア階級の発生と台頭にともない、歴史的・経済的ないしは物質的諸関係が人間全般の死活を制すると考える史的唯物論がマルクス Karl Marx によって集大成された時代でもあった。ここでヨーロッパにおける自然概念の変遷をことごとく述べるつもりはないが、19世紀中葉以降の上記のような一般的趨勢のなかでは、自然は、ただに歴史と人間中心の観点から生気を奪われた物質的総体、労働と生産の基盤として眺められた、といっても過言ではないであろう。自然に対する人間優位の風潮が怒濤となって高まる時代に、これとは反対に自然優位の思想を控え目に物語るシュティフターの作品が十分な理解をもって迎えられなかったのも、あながち不思議ではない。たとえば『森の小径』は、「すでに滅亡しカビ臭くさえ思われるのらくら者」の生活を、フモリスティッシュに、あるいは若干楽天的に描いた通俗小説に類する物語にみえるかもしれないが、このような時代の対型 (*Gegenbild*) として眺めると、いちだんと奥行を深めるものがある。もちろん、作品自律の解釈法に基づいてみても、自然による救済、自然を通じて「人間が人間になること」のテーマを柱に、アクチュアルな叙述形式に則った、作者独自の醇乎たる一篇の物語が形成されていることは知られよう。現実 (*Wirklichkeit*) とは活動し作用するもの (*das Wirkende*) の謂を秘めているが、作者は、活動し作用するものとしての現実から自然の倫理性と叡知性を排除することはない。むしろ、主人公のエゴティスムスに仮託された卑少な人間中心主義を寛容な態度でたしなめ、自然のなかの一部とし



1975. 3 シュティフターの『森の小径』における自然による救済(中村) 167 (1059)  
ての人間の位置を問うているように思われる。シュティフターが、その桁はずれなまでの煙霞の癖のあまり、狭義にいう現実の錯綜した社会的諸関係に筆を染めなかったという批判は、当然起こりえたし、また将来も起こることであろう。それは、幾分かは正鵠を失していないかもしれないが、如上のような文学的志向と彼の生まれついで画家的な天稟からして、ある意味ではないものねだりにも等しいし、またそれによってシュティフターの文学が根幹から覆されることもありえない。

おわりに、ヘッベル・グループ Hebbel-Kreis に所属し、必ずしもシュティフターの作品を肯定する立場にはなかったが、一顧に価するシュティフター論を著わしている、Emil Kuh の言葉を紹介しておこう。彼は、シュティフターの作中人物たちを評して、次のように述べている。

「人物たちは自然(Landschaft)のなかにあられ、恩寵の地へ迷り着こうと、さながら巡礼者のように自然のなかを通り抜けてゆく。<sup>(19)</sup>」

けだし、至言というべきであろう。

#### 注

- 1 Adalbert Stifters Leben und Werk in Briefen und Dokumenten. Hrsg. von K. G. Fischer, Frankfurt am Main 1962. S. 599.
- 2 Vgl. 藤村宏：「ロマン主義とリアリズムの間」。東京大学出版会，1973年。S. 181.
- 3 Konrad Steffen：Adalbert Stifter und der Aufbau seiner Weltanschauung. Horgen-Zürich 1931. Wege zur Dichtung. Bd. 10, S. 73.
- 4 Adalbert Stifter：Studien Bd. II. Insel-Verlag, Leipzig 1968. S. 790.
- 5 Wilhelm Hemsén：Blätter für literarische Unterhaltung, Jahrg. 1851, Nr. 52-58, Wien. In：Moritz Enzinger：Adalbert Stifter im Urteil seiner Zeit. Baden bei Wien 1968. S. 167-168.
- 6 Wilhelm Kosch：Adalbert Stifter und die Romantik. In：Prager Deutsche Studien. H. I, Prag 1905, S. 60, S. 81, S. 84.  
Wilhelm Kosch：Adalbert Stifter als Mensch, Künstler, Dichter und Erzieher. Regensburg, 1952. S. 59.
- 7 藤村宏：a. a. O. S. 95-S. 116.

- 8 Vgl. Wolfgang Kayser : Das sprachliche Kunstwerk. 13. Aufl. München 1968. S. 57.
- 9 Adalbert Stifters Sämtliche Werke. 25 Bde. Unter Mitwirkung von Franz Müller, hrsg. von Leopold Müller und Josef Nadler. Prag 1911. In : Bd. 4, S. VII.
- 10 Otto Pauzar : Ideen und Probleme in Adalbert Stifters Dichtungen. In : Prager Deutsche Studien. H. 43, Reichenberg i. B. 1928. S. 46.
- 11 Adalbert Stifter : Über die Schule. Gesammelte Werke. Hrsg. von Max Stefl. Wiesbaden 1959. 6. Bd. Kleine Schriften. S. 369.
- 12 Ullstein Lexikon der deutschen Sprache, Frankfurt Berlin. 1969.
- 13 Hans Dietrich Irmischer : Adalbert Stifter, Wirklichkeitserfahrung und gegenständliche Darstellung. München 1971. S. 66.
- 14 Adalbert Stifter : Studien Bd. II. Leipzig 1968, S. 790.
- 15 Adalbert Stifters Leben und Dokumenten, a. a. O. S. 234.
- 16 松村国隆 : シュテュフターの Der Waldsteig. 森川晃卿先生還暦記念論集 1973, S. 107.
- 17 Vgl. Emil Staiger : Adalbert Stifters „Brigitta“. In : Trivium. Jg. I. H. I. 1942. S. 82.
- 18 Alois Reimund Hein : Adalbert Stifter Bd. I. 2 Aufl. Wien 1952. S. 342.
- 19 Emil Kuh : Adalbert Stifter. Wien. 1868. In : Moritz Enzinger : a. a. O. S. 296.

#### 参 考 文 献

- Joachim Müller : Von Schiller bis Heine. Darin; Stifters Humor. Zur Struktur der Erzählungen „Der Waldsteig“ und „Ncchkommenschaften“. Adalbert Stifter-Institut des Landes Oberösterreich. Vierteljahrschrift. Jg. 1 ~ Jg. 8.
- R. G. Collingwood : The Idea of Nature, A Galaxy Book, 1960.
- 真田収一郎 : シュテュフター文学に於ける人間と自然, 芸文研究 No. 33, 1974.